

イングリッシュ・スクール

英国学派の確立

— マーティン・ワイトの生涯と業績 —

大 中 真*

- I はじめに
- II イギリスにおける先行研究
- III ワイトの生涯と業績
- IV ワイトにみられる国際法史の思想
- V おわりに

I はじめに

英国学派 (the English School) とは、第二次世界大戦後のイギリスで発展した国際関係論の理論の一つである。筆者はこれまで、まず英国学派の源流を検証すべくイギリスにおける国際関係論の起源を探り¹⁾、次に英国学派の生成に非常に大きな役割を果たしたと考えるチャールズ・マンシングの思想に考察を加えてきた²⁾。過去本誌に発表した以上2本の論説を受けて、本論では最後に、英国学派を確立したといえるマーティン・ワイト (Robert James Martin Wight, 1913-1972) に光を当てる。筆者は、英国学派の特徴の一つと考える国際法史の要素について考察を加えたいと考えているが、日本ではまだ、ワイトその人に焦点をあてた本格的な研究はほとんど存在せず、その人物像についても決して明快に説明さ

『一橋法学』(一橋大学大学院法学研究科) 第11巻第3号 2012年11月 ISSN 1347-0388

※ 一橋大学大学院法学研究科博士後期課程、桜美林大学准教授

- 1) 大中真「英国学派の源流 — イギリス国際関係論の起源」『一橋法学』第9巻、第2号 (2010年) 所収。
- 2) 大中真「英国学派の生成 — チャールズ・マンシングとその思想」『一橋法学』第10巻、第2号 (2011年) 所収。

れているとは言い難い。従って、彼の生涯を辿るとともに、その研究業績の概観を紹介することで、今後のさらなる研究のための土台を築くことが、本論に課せられた目的である。

初めに日本における先行研究について見ておこう。あまり知られていないことだが、ワイトは意外な形で日本に紹介されている。イギリス人政治学者ハロルド・ラスキの代表作の一つに、『政治学入門』がある。1931年に初版が出されたこの書物は、世界中で広く読まれ、日本語訳も戦前には出版されている³⁾。ラスキは1950年に病死するのだが、それまでに同書は8版を重ねており、彼の死後1951年に第9版が出版されることになった。その際、補訂を行ったのが、実はワイトであった⁴⁾。彼は、ラスキ死去の前年にあたる1949年にLSE（ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス）の国際関係論担当の準教授（Reader）に就任しており、ごく短い期間ではあったがラスキと同僚の関係にあった。日本では戦後、ワイトが手を入れたこの第9版をもとにした翻訳出版が複数出ており、どの翻訳書にも、ワイトによる「改訂者の序文」が掲載されている⁵⁾。従って戦後日本の政治学徒は、彼の名を目にしているはずである。特に、1965年に横越英一訳で出された本には、巻末の訳者あとがきで「国際政治学者ワイト」について12行ほど、簡単に人物と業績紹介がなされており⁶⁾、事実上この解説が、日本におけるワイト紹介の初めではないかと考えられる。

ワイトを一個の研究者として最初に紹介した研究は、ヒデミ・スガナミによるものと見られる⁷⁾。そもそもスガナミ論文は、後の英国学派（当時はそのような言い回しさえ存在していなかったが）の存在を最初に日本語で考察したものであ

3) 早くも1932年に『国家論』として、植田清次訳、理想社出版部から出ている。

4) Laski, H. J., *An Introduction to Politics*, new edition prepared by Martin Wight (London: George Allen & Unwin, 1951). なお、ワイトの改訂を助けたのは、ラスキの（つまりワイトとも）同僚であった当時政治学担当助手（Assistant Lecturer）のラルフ・ミリバンド（Ralph Miliband）と当時国際関係論担当講師（Lecturer）であったジェフリー・グッドウィン（Geoffrey Goodwin）であった。

5) H. J. ラスキ著、M. ワイト改訂『新訂 政治学入門』尾形典男訳（創元社、1957年）、H. J. ラスキ『政治学入門』来住正三訳（南雲堂、1963年）、H. J. ラスキ著、M. ワイト改訂『新訂 政治学入門』横越英一訳（創元新社、1965年）、など。ただどの訳者も、“Reader”を「講師」と誤訳かつ誤解しているが。

6) ラスキ、『新訂 政治学入門』横越英一訳、181-182頁。

ったが、その焦点はマニングと、英国学派を最も代表する研究者であるヘドリー・ブルにあてられている。そのため、ワイト個人を正面から研究対象に取り上げた論考は、信夫隆司のものが最初といえるであろう⁸⁾。信夫論文が発表された1980年代末には既に、イギリスではワイトの名声は高まっていたが、日本では彼の名前はほとんど知られていなかった。また、彼の思想を結晶化したものと言える代表作『国際理論』も本国でさえ未刊行であった⁹⁾。しかし資料の制約がある中で、信夫はワイトの3つのパラダイム、すなわちマキアヴェッリ主義、グロティウス主義、カント主義を紹介し、かつ分析を加えている。

英国学派を主題として、その中でのワイトの位置づけを考察したのが、細谷雄一である¹⁰⁾。細谷はその冒頭で「英国学派の国際政治理論の全体像を提供すること」や「ブルやワイトの一連の研究を紹介すること」が論文の目的ではないと断っているが、それでも細谷論文は、日本語で書かれたものとしては、英国学派を最も包括的に理解しようと試みた研究といえよう¹¹⁾。

ワイトの思想の中にあるグロティウスの伝統に注目したのは、山内進である¹²⁾。山内は、ワイトとブルの二人には、グロティウスの思想が大きな位置を占めていることに言及した上で、中江兆民の『三酔人経綸問答』の登場人物3人との類似性を指摘している。すでに山内は1990年代前半に、グロティウス主義者としてオランダの国際法学者ヴァン・ヴォレンホーヴェンやイギリスの国際法学者ローターバクトを、また新グロティウス主義者としてブルを分類する論文を発表していた¹³⁾。2つの山内論文は、国際法史の文脈からワイトやブルなどの英国学派を解釈したものと言えるだろう。そしてこの立場は、筆者と共通するもの

7) 菅波英美「英国における国際社会論の展開」『国際法外交雑誌』第78巻、第5号(1979年)所収。同論文の刊行は、ワイトの死後7年後のことである。

8) 信夫隆司「マルチン・ワイトの国際政治理論——パラダイムを中心として」日本大学法学部法学研究所『法学紀要』第30巻(1989年)所収。

9) ワイトの『国際理論』英語版原著が刊行されたのは、信夫論文発表から2年後の1991年のことである。

10) 細谷雄一「英国学派の国際政治理論——国際社会・国際法・外交」『法学政治学論究』第37号(1998年)所収。

11) 細谷、同上論文、241頁。

12) 山内進「グロティウスの伝統——国際法の思想史と国際社会」『一橋論叢』第122巻、第4号(1999年)所収。

である。

日本におけるワイト研究は、しかし、今日に至るまであまり進んでいない。ブルの代表作“*The Anarchical Society*”が、2000年に臼杵英一によって『国際社会論』として翻訳刊行され¹⁴⁾、しばしば言及されるようになったことは、対照的である。ようやく2007年、ワイトの『国際理論』が日本語で翻訳刊行され、あたかも独立した一個の小宇宙を形成しているような彼の思想に触れることが容易になった¹⁵⁾。さらに2010年には、歴史家のハーバート・バターフィールドとワイトが編集した古典的作品“*Diplomatic Investigations*”（外交の研究）が、『国際関係理論の探究』として日本で翻訳刊行される¹⁶⁾など、日本国内においてもワイトを学問的議論の俎上にものせる環境が整いつつあるのが、現状である。今後は日本でも、ワイトについてさらなる研究が進むものと期待される¹⁷⁾。

なお、ロンドン中心部のテンプル近くにあるLSE図書館（正式名称は大英図書館政治経済分館（British Library of Political and Economic Sciences））の公文書室に、マーティン・ワイト文書が所蔵されている¹⁸⁾。これまで日本では知られてこなかったこの未公刊資料には、極めて膨大な数のワイトに関連する文書が

13) 山内進「グロティウスのアンビヴァレンス——国家主権と人類の共通利益」大谷良雄編『共通利益概念と国際法』（国際書院、1993年）所収。

14) Bull, Hedley, *The Anarchical Society: A Study of Order in World Politics*, 2nd ed. (London: Macmillan, 1995) [ヘドリー・ブル『国際社会論——アナーキカル・ソサイエティ』臼杵英一訳（岩波書店、2000年）]。

15) Wight, Martin, *International Theory: The Three Traditions* (Leicester: Leicester University Press, 1991) [マーティン・ワイト『国際理論——三つの伝統』佐藤誠、安藤次男、龍澤邦彦、大中真、佐藤千鶴子訳（日本経済評論社、2007年）]。

16) Butterfield, Herbert and Martin Wight, eds., *Diplomatic Investigations* (London: George Allen & Unwin, 1966). [H・バターフィールド、M・ワイト編『国際関係理論の探究——英国学派のパラダイム』佐藤誠、安藤次男、龍澤邦彦、大中真、佐藤千鶴子、齋藤洋ほか訳（日本経済評論社、2010年）]。

17) そうは言っても、ここ数年の間に、ワイトに関する研究成果が日本の若手研究者の間でも刊行され出したことは、筆者にとっても勇気づけられることである。ここでは以下の2つを紹介したい。池田丈佑「賢慮・正義・解放——英国学派の倫理観と現代世界政治理論における展開」『立命館国際地域研究』第29号（2009年）69-83頁。角田和広「M・ワイトの国際社会論における勢力均衡の役割——英国学派の文脈から」『立命館国際地域研究』第35号（2012年）57-70頁。

18) Papers of Martin Wight, LSE Library Archives, London. (本論では以下、*Wight Papers*と略)

含まれている。筆者はこれまで2度、研究資金を得て現地を短期訪問したが、ウェブ上では約100ボックスが所蔵されていると表記されているものの、実際には250を超えるファイルが存在し、さらにファイルによっては複数の別々の下部ファイルから成り立っていることも判明している。

加えて、同じくロンドン中心部に位置する王立国際問題研究所図書室には、「国際政治理論に関する英国委員会」の未公刊資料が所蔵されており、この中にもワイトに関する貴重な資料が含まれていることを、筆者の現地調査によって確認している¹⁹⁾。ワイト文書の全貌を明らかにした上で彼の人生と業績について論考を著すのは至難の業であるが、本論ではこうした成果をも取り入れつつ、議論を進めてゆきたい。

II イギリスにおける先行研究

ここまで、日本においてワイトがどのように紹介されてきたのかを見てきた。では、イギリス本国での先行研究はどうであるか。もとよりこの小論で全てを検討することは不可能だが、その一端を示すことはできるであろう。

ワイトが生前には極端な寡作家であったこと、それにも拘わらずLSEでの伝説的な名講義によって当時から有名であったことは、ブルをはじめ多くの研究者が指摘している²⁰⁾。ワイトの特徴は、彼の死後、同僚でかつ後輩にあたるブルらによって著作が編集・刊行され、それと平行してワイト個人に対する学問の評価も高まっていった点にある。

その意味で、ワイトの死後に設立された「マーティン・ワイト記念信託団体(The Martin Wight Memorial Trust)」の存在は大きいと、筆者は考える。ワイトは1972年7月に59歳の若さで急逝するのだが、その早過ぎる死を悼んだ友人や同僚の寄付金によってこの信託団体が設立され、毎年1名を選んで「マーティ

19) Papers of the British Committee on the Theory of International Politics, Royal Institute of International Affairs, Chatham House, London. (本論では以下、*BCTIP Papers* と略)

20) Wight, *International Theory*, ix [邦訳前掲書、395頁].

ン・ワイト記念講演」を行うことが決定した²¹⁾。生前にワイトが勤務した3つの組織、王立国際問題研究所(チャタム・ハウス)、LSE、サセックス大学がその活動を支援することになった。こうして第1回の記念講演、1975年4月にバターフィールドによる「国家理性——道徳と政府の関係」が、サセックス大学で開かれたのである²²⁾。

その第2回講演は1976年1月にLSEで、ブルによって行われたが、表題は「マーティン・ワイトと国際関係理論」だった。その全文は同年発行の“*British Journal of International Studies*”誌(以下、*BJIS*と略)に掲載され²³⁾、ワイトを最もよく理解した者による解説としての地位を得た。ワイトの死から20年後の1991年、彼のLSEでの伝説的講義をまとめた『国際理論』がついに刊行されると、ブルの講演は同書の冒頭で再録されることとなる。

以後、マーティン・ワイト記念講演は途切れることなく毎年続き、2010年11月には第36回目がイアン・クラークによって、「中国と合衆国——覇権の継承?」との題目で行われている。

もう一つ、イギリスにおけるワイトに対する評価を高めるにあたって、イギリス国際関係学会(BISA: The British International Studies Association)の果たした役割は大きいと、筆者は考える²⁴⁾。同学会は1975年に設立され、同時に学会誌*BJIS*の刊行が開始されたが、その当初からの編集諮問委員会の一人にブルが就任していた。しかし、学会設立および学会誌刊行開始当時は、ワイトがそれほど高く評価されていたとは言い切れない面がある。一例として、*BJIS*創刊号の巻頭論文で、ランカスター大学教授のレイノルズが寄稿した「国際関係学研究——回顧と展望」を見てみよう²⁵⁾。

レイノルズ論文は、イギリスにおいて国際政治学がどのように誕生、発展して

21) The Martin Wight Memorial Trust, <<http://www.mwmt.co.uk/>>, accessed 20th October 2011.

22) Butterfield, Herbert, “Raison d’État: The Relations between Morality and Government,” The Martin Wight Memorial Trust, <<http://www.mwmt.co.uk/>>, accessed 20th October 2011.

23) Bull, Hedley, “Martin Wight and the Theory of International Relations: The Second Martin Wight Memorial Lecture,” *British Journal of International Studies*, Vol. 2, No. 2 (1976), pp. 101-116.

きたかを分析したものである。もちろん、筆者個人の見方が反映されていることを考慮する必要があるが、ワイトやブルの重要性はほとんど指摘されていない。わずかに、バターフィールドとワイトの『外交の研究』が挙げられて、その方法論が歴史的かつ哲学的であると簡単に言及しているに過ぎない²⁶⁾。レイノルズは、アメリカ国際政治学の優位を認め、アメリカの著名な国際政治学者であるジェームズ・ローズノウ、カール・ドイッチュなどに多くの頁を割いて詳細な解説を加えているため、なおさら対比が鮮明である。

しかし、この1975年以降、ワイトをめぐる知的状況は急激に変化する。先述したように、*BJIS* 刊行2年目の1976年、当時まだオーストラリア国立大学教授であったブルによる「マーティン・ワイトと国際関係理論」論文が掲載された。翌1977年にはワイトの『国家システム』²⁷⁾が、さらに1978年には『^{パワー・ポリティクス}権力政治』²⁸⁾が、それぞれブルの編集の下に相次いで刊行された。前者には編者のブルによる「マーティン・ワイトと国際関係の研究」と題する序論が、後者にもやはり共同編者であるブルとホルブラードによる序論が付せられ、それぞれワイトの業績や人となりを伝えている。ブルによる、こうした精力的なワイトの業績の紹介が、学界全体におけるワイトの評価を急速に高める契機になったのではないかと筆者は推測する。1979年の*BJIS*には、エリ・ケドゥーリによ

24) 筆者は以前、BISAを「イギリス国際学会」と訳した(大中真「^{イングリッシュ・スクール}英国学派の源流——イギリス国際関係論の起源」『一橋法学』第9巻、第2号(2010年)545頁)。しかし英米の学界においては、国際関係論(IR: International Relations)が多くの学問分野に跨がる性質を持っていることを指し示すために、敢えてIRという用語を学会名に付けることを避ける傾向があるといい、その例がBISAだという。つまり、学会員の大多数が実際には政治学研究から出発していることから、IRの研究領域が「国際政治学」だと見なされている実態が原因のようである。そこで筆者も、今後はBISAを、その本来の性質を表す訳語である「イギリス国際関係学会」という名称で統一することとしたい。“International Relations (IR),” in Evans, Graham and Jeffrey Newnham, *The Penguin Dictionary of International Relations* (London: Penguin Books, 1998), p. 275.

25) Reynolds, P. A., “International Studies: Retrospect and Prospect,” *British Journal of International Studies*, Vol. 1, No. 1 (1975), pp. 1-19.

26) *Ibid.*, p. 18.

27) Wight, Martin, *Systems of States*, ed. by Hedley Bull (Leicester: Leicester University Press, 1977).

28) Wight, Martin, *Power Politics*, ed. by Hedley Bull and Carsten Holbraad (Leicester: Leicester University Press, 1978).

て、アーノルド・トインビーとワイトとの関係を考察した論文も掲載されている²⁹⁾。

1980年代に入ると、さらに事態は大きな展開を見せる。イギリス国際関係学会誌 *BJIS* は、1981年からその誌名を“*Review of International Studies*”（以下、*RIS*と略）へと変更したが、その新名称号の冒頭に掲載された編集部からの挨拶文の中で、わざわざワイトに対する言及がなされている。「近年、『古典的』国際理論の復活がみられる」として、「先に亡くなったマーティン・ワイトの著作がいくつか編集され出版されたことが、その復活に刺激を与えた」と述べられている³⁰⁾。わずか6年前の、前述したレイノルズ論文を思い起こすと、何という違いであろう。

この号が歴史的となったのは、収められたロイ・ジョーンズによる巻頭論文「国際関係論の英国学派」が、「英^{イングリッシュ・スクール}国学派」という名称を決定づけたからである。なぜ「英国学派」と名付けられたかについては、筆者はすでに以前論じているのでここでは繰り返さない³¹⁾。しかしジョーンズは、研究手法に対する批判的立場から皮肉まじりに「英国学派」と名付けたのであり、その矛先は亡くなって日も浅いマニングとワイトの二人であった³²⁾。ブルはまだ存命ですでにオーストラリアからオクスフォード大学に移っており、また *RIS* の編集委員をしていたためであろう、ジョーンズもブルに対しては正面からの批判を避けている。

ジョーンズはマニングを「寓意的、捕らえ所がない、折衷主義的」であり、他方でワイトは「穏当で分別があり、微に入り細にわたり、史実に基づいている」と評している³³⁾。またマニングについてはその概念用語の不明瞭さを、ワイトにはいわゆる「3つのR (Realism (現実主義), Revolutionism (革命主義), Rationalism (合理主義))」の分類分けの単純化を、それぞれ鋭く指摘している。

29) Kedourie, Elie, “Religion and Politics: Arnold Toynbee and Martin Wight,” *British Journal of International Studies*, Vol. 5, No. 1 (1979), pp. 6-14. 本論文は、1978年5月にサセックス大学で行われた第4回マーティン・ワイト記念講演の原稿である。

30) Spence, J.E., “Editorial,” *Review of International Studies*, Vol. 7, No. 1 (1981), iii.

31) 大中真、「英国学派の源流」、545-547頁。

32) ワイトは9年前の1972年に、マニングは3年前の1978年に、それぞれ亡くなった。

33) Jones, Roy E., “The English School of International Relations: A Case for Closure,” *Review of International Studies*, Vol. 7, No. 1 (1981), p. 9.

ジョーンズの指摘には的を得てない点もあるように筆者は思うが、マニングとワイトという、全く性質の異なる二人の研究者を同じ英国学派の始祖として崇めることには無理がある、とするジョーンズの主張には、筆者も一部首肯できる。

RIS 同号には、もう一本、マイケル・ニコルソンの論文「謎の人、マーティン・ワイト」と題する論文が掲載されている³⁴⁾。ニコルソンは、ワイトの業績と影響力を評価しつつも、彼の思想に悲観主義 (pessimism) が色濃いことを指摘し、その原因を彼の信仰に求めている。すなわち、彼がキリスト者として非常に強い信仰を持ち、若い頃に絶対平和主義者 (pacifist) であったことに注目し、個人の宗教的態度が思想に反映されていることを、社会科学の見地から批判しているのである。実際にワイトは、第二次世界大戦の開戦に際して自分の信条から、良心的兵役拒否者となることを選んでいる。

ニコルソンによれば、ワイトの悲観主義は国際関係の現状維持つまり現状肯定に陥るといふ。その例として、ワイトが著書『国家システム』の中で、「希望は、政治的徳ではない。神学的徳なのである」と述べた部分を引用し、強く批判している。ニコルソンの考えでは、希望は政治的な徳であるばかりか、知的な、かつ道徳的な徳である。悲観主義からは、平和、正義といった価値を追求できないといふ³⁵⁾。

論文の註で、わざわざニコルソンは、決して自分は個人攻撃しているのではないと説明しており、実際に文末でワイトを「抜きん出た『芸芸の人』 (“Arts man” *par excellence*)」と呼んでいる。ニコルソン論文の功績は、それまであまり語られなかったワイトの宗教的側面を前面に出して論を展開した点にあるといえよう。しかし、個人の信仰の問題に焦点を当て過ぎており、ワイトの知的世界を体系的に理解しにくくなってしまった嫌いがあると、筆者は感じる。

ともあれ、このジョーンズ論文とニコルソン論文によって、英国学派という名称が定着することになり、またワイトに対する関心と評価も (賛否両論あるという意味でも) より一層高められたと言ってよいだろう。ニコルソン論文に対して

34) Nicholson, Michael, “The Enigma of Martin Wight,” *Review of International Studies*, Vol. 7, No. 1 (1981), pp. 15-22.

35) *Ibid.*, p. 18.

は、1年後にアラン・ジェイムズが同誌 (RIS) に反駁論文³⁶⁾を發表し、さらにニコルソンもジェイムズに反駁論文³⁷⁾を出し、当時ワイトの評価についての学問的関心が沸騰していたことが窺える。その後も、RIS誌上では、たびたび英国学派をめぐる論文が掲載され³⁸⁾、また何度か英国学派の特集が組まれ³⁹⁾、こうした過程の中で英国学派を語る際のワイトへの言及や文献引用が定着してゆく。加えてRIS誌を超えて、他の学会誌でも英国学派を扱う論文が散見されるようになってくる。

1990年代後半になると、英国学派そのものに関する研究書が公刊される。ティム・ダンによって出された単著『国際社会論の創造 (Inventing International Society)』がそれであるが、その副題が「英国学派の歴史」となっていることに象徴されるように、学派の流れを歴史的発展の視点から代表的人物に焦点をあてて分析した研究である。ワイトはその中の1章に割かれ、英国学派の「ゴッドファーザー教父」と描写された⁴⁰⁾ことは、ある意味でワイトの位置づけを確定したと言えるだろう。なぜなら、ダン自身がワイトと並んで英国学派の中心的な一員と見なされることが多く⁴¹⁾、またダンの著作もいわば英国学派研究の基本図書として、今日まで広く読まれているからである。

ただ、ダンの研究もまた、議論を巻き起こした。その理由の一つは、彼が英国

36) James, Alan, "Michael Nicholson on Martin Wight: A Mind Passing in the Night," *Review of International Studies*, Vol. 8, No. 2 (1982), pp. 117-123.

37) Nicholson, Michael, "Martin Wight: Enigma or Error?," *Review of International Studies*, Vol. 8, No. 2 (1982), pp. 125-128.

38) 例えば、1988年のRIS誌上のグレイダー論文と、それに対する翌年のウィルソンの反駁論文などである。Grader, Sheila, "The English School of International Relations: Evidence and Evaluation," *Review of International Studies*, Vol. 14, No. 1 (1988), pp. 29-44; Wilson, Peter, "The English School of International Relations: A Reply to Sheila Grader," *Review of International Studies*, Vol. 15, No. 1 (1989), pp. 49-58.

39) 例として、2001年のRIS誌上には英国学派をめぐる議論の場 (Forum) が特に設けられ、アダム・ワトソンやバリー・ブザンら計6名が意見を論じている。*Review of International Studies*, Vol. 27, No. 3 (2001), pp. 465-513. また翌2002年には英国学派特集がなされた。*Review of International Studies*, Vol. 28, No. 4 (2002).

40) Dunne, Tim, *Inventing International Society: A History of the English School* (Basingstoke: Palgrave, 1998), p. 47.

41) Griffiths, Martin, Steven C. Roach, and M. Scott Solomon, *Fifty Key Thinkers in International Relations*, 2nd ed. (London: Routledge, 2009).

学派の中にE・H・カーを加えたことと、もう一つはマニングを学派の中心的人物から除外したことである。この点については、アンドリュー・リンクレイターとスガナミによって2006年に出された『国際関係論の英国学派—同時代的再評価』が鋭く指摘している⁴²⁾。筆者もまた、英国学派の誕生と成立にあたって、そして何よりワイトの思想形成にあたってマニングの役割は極めて大きいと考えており⁴³⁾、ダンによる範疇分けには同意できない。しかし同時に言及しなければならないこととして、リンクレイターとスガナミの同研究書では、ワイトの扱いと評価が低いのではないかと筆者は考えており、この点ではダンの理解に共感を抱いている。

世紀を超えると、ついにワイト個人に焦点をあてた研究が刊行される。イアン・ホールによって2006年に出された『マーティン・ワイトの国際思想』である⁴⁴⁾。筆者が本論文を執筆している段階では、ホールの研究書はワイトに関する唯一の評伝であり、研究書である。ホールは、現時点で入手可能な全てのワイトの著作（新聞記事や書評も含む）、ワイトに関する膨大な未公刊一次資料（大英図書館ワイト文書ほか）、さらに多くの二次資料に依拠して考察しており、ワイト研究を進める上での手掛かりとなる優れた研究である。

ホールの研究によって、ワイトの全体像がかなりの程度明らかにされたといえよう。彼が結論で述べているように、今後はワイトの思想が今の時代に何を残したか、どのような問題提起をいまだに与えているかを考察すべきなのかもしれない。ホールはその一つとして、アレグザンダー・ウェントの論文を引用して、ワイトがよく語った世界国家（a world-state）の創設を例に挙げている⁴⁵⁾。ワイトの思想が今日でも注目されるのは、時空を超えて解釈可能なその普遍性にあるように筆者は考える。ここまで、イギリスにおける先行研究を概観してきたが、次

42) Linklater, Andrew and Hidemi Suganami, *The English School of International Relations: A Contemporary Reassessment* (Cambridge: Cambridge University Press, 2006), pp 33-38.

43) 大中真、「イングリッシュ・スクール英国学派の生成」。

44) Hall, Ian, *The International Thought of Martin Wight* (New York: Palgrave, 2006).

45) *Ibid.*, p. 159. ホールが註で引用したウェントの論文は以下である。Wendt, Alexander, "Why a World State is Inevitable: Teleology and the Logic of Anarchy," *European Journal of International Relations*, Vol. 9, No. 4 (2003), pp. 491-542.

章ではワイトの生涯と業績を簡単に辿ってみたい。

Ⅲ ワイトの生涯と業績

1. 青年期～職業の模索

ワイトについては、前述したホールの著作が体系的にその人生と研究を伝えている。またマーティン・ワイト記念財団のウェブサイトには、ワイトの生涯と業績について短い伝記が掲載されているが、それもホールが執筆したものである⁴⁶⁾。そこで本論文では、この伝記に依拠しつつワイトの生涯を再構成してみたい⁴⁷⁾。

ロバート・ジェイムズ・マーティン・ワイトは、1913年11月26日にイングランド南部のサセックス州ブライトンで生まれた。父エドワードは一般開業医(GP)、母の名はマーガレッタで、3人息子の次男がマーティンだった。彼はイングランド南西部のバークシャーにあるブラッドフィールド・コレッジで5年間の中等・高等教育を受けた後、奨学金を得て、「溜め息橋」で有名なオクスフォード大学ハーフォード・コレッジに進学した。ハーフォードは、『リヴァイアサン』のトマス・ホップズや『ガリバー旅行記』のジョナサン・スウィフトが在籍していたことでも知られているが、ワイトは現代史を専攻し、第一級の優等成績で1935年に卒業している。彼の指導教授の一人は、第一次世界大戦史の研究で有名なC・R・M・F・クラットウェルだったという⁴⁸⁾。ワイトがオクスフォードで、法学でも哲学でもなく歴史学を学んだという事実が、研究の流儀に終生大きな刻印を残したように筆者には思われる。

46) Hall, Ian, "Martin Wight: A Biographical Overview of his Life and Work," The Martin Wight Memorial Trust, (<http://www.mwmt.co.uk/>), accessed: 10th March 2012.

47) この第3章では、基本的に前註で挙げたホールの伝記(ウェブサイト版)を参考に執筆したが、他に以下の「権威ある」人名事典をも参照した。Pitt, H. G., "Wight, (Robert James) Martin (1913-1972)," *Oxford Dictionary of National Biography*, Vol. 58 (Oxford: Oxford University Press, 2004), pp. 845-846. 以下、特にいちいち註を設けないが、以上2つの文献に依ってワイトの生涯を再構成する。

48) 以下が代表作である。Cruftwell, C. R. M. F., *A History of the Great War, 1914-1918* (Oxford: Clarendon Press, 1934).

ホールによる評伝の興味深い点は、ワイトの人生を3つの段階に分けていることである。すなわち、「36歳に至るまで、書籍販売人、高校教師、研究員、ジャーナリストと、多種多様な職業に就いた」時期（1935-1949年）が第1期、LSE国際関係学部で準教授職にあった第2期（1949-1961年）、そして最後に、新設されたサセックス大学の歴史学教授に招聘され、亡くなるまでその職にあった第3期（1961-1972年）である。ここでも、ホールの3段階に従って見てゆきたい。

オクスフォードの学部生だった頃のワイトは、この時期の知識人一般がそうであったように、国際連盟の熱心な支持者だったが、1935年に起こったアビシニア危機によって、連盟の無力さに失望したようである。イタリアの侵略行為に際して連盟をいわば見限った者は多かったが、ワイトの反応が際立っているのは、彼がこれを機にキリスト教絶対平和主義に強く傾倒したことである（もともとワイトは英国国教徒として受洗していた）。特に、絶対平和主義者として当時のイギリスで大きな影響力を持っていたディック・シェパード牧師に感化され、その活動を支援するようになった。シェパードは1936年に「平和の誓い同盟（Peace Pledge Union, 略称PPU）」を創設し、後にバートランド・ラッセルらも参加したPPUの活動は今日まで続いている⁴⁹⁾。そしてワイトが、刊行された出版物に初めて執筆した論文も、同じ1936年に書かれ、題名は「キリスト教絶対平和主義」だった⁵⁰⁾。ホールによればこの頃、ワイトはロンドンでPPUの書店を経営していた時期もあったという。

ワイトが初めて公にした「キリスト教絶対平和主義」論文は、イギリスのキリスト教知識普及協会（SPCK: Society for Promoting Christian Knowledge）が発行していた雑誌『神学』に掲載された。同協会は1698年の創設で、その出版部はオクスフォード大学出版会、ケンブリッジ大学出版会に次ぐイギリス第3の古さを誇っている。ワイトの論考は、随所に新約聖書からの引用がなされるなど宗教色の濃いものではあるが、その根幹は正戦論についてである。興味深いことに、正戦論発展の既述では聖アウグスティヌス、聖トマス（トマス・アクィナス）、ビトリア、スアレス、タパレリ（19世紀イタリアのカトリック神学者のルイ

49) Peace Pledge Union, <<http://www.ppu.org.uk/>>, accessed: 12th March 2012.

50) Wight, Martin, "Christian Pacifism," *Theology*, Vol. 33, No. 193 (1936), pp. 12-21.

ージ・タパレッリと思われる)、そしてグロティウスの名が挙げられている⁵¹⁾。ワイトは、執筆活動を開始した最初期から、キリスト教に関連する文脈の上ではあるが、国際法史の思想家に興味を持っていたことを示しているといえるだろう。

翌1937年、ワイトは王立国際問題研究所、通称チャタムハウスに、研究員として職を得た。この時彼の上司となったのが、文明史家アーノルド・トインビーだった⁵²⁾。同じ年にシェパードは病死しており、ワイトは代わって、トインビーの強い影響を受けるようになる。トインビーの代表的名著『歴史の研究』はすでに1934年に刊行が始まっていたが、それを読んだワイトは、まさに目から鱗が落ちるような衝撃を受けたと伝えられている。以後、二人の関係は、終生続くことになる。ワイトの著作および大学での講義（ここでは特に彼の『国際理論』を念頭に置いている）の特徴に、彼の驚異的な博識を縦横無尽に駆使して、古今東西の古典から同時代の新聞記事までを次々に引用して解説する様式がある。地域、時代、学問分野を超えて国際理論を構築しようとしたワイトの研究手法には、トインビー独自の文明史観の大きな影響があるように、筆者には思えてならない。実際にホールは、一般的に考えられている以上に、トインビーの知的影響は終生ワイトに及んだと指摘している⁵³⁾。

ワイトはトインビーの感化を受けつつも、シンクタンクの研究員という地位には満足せず、自身では大学教員の地位を捜していたようである。しかし思うように果たせず、1938年にはチャタムハウスを辞して、ハーフォード州にあるハイリーベリー・コレッジ（日本の中高一貫校に相当）で歴史学の上級教師に着任した。ワイト25歳の時であったが、すでに当時から彼は教育と講義に才能を発揮

51) *Ibid.*, p. 16.

52) トインビーとチャタムハウスとの関わりを中心に論じた研究として、以下を参照。Brewin, Christopher, "Arnold Toynbee, Chatham House, and Research in a Global Context," in David Long and Peter Wilson, eds., *Thinkers of the Twenty Years' Crisis: Interwar Idealism Reassessed* (Oxford: Clarendon Press, 1995) [クリストファー・ブリューイン、中西輝政、関静雄訳「アーノルド・トインビー、チャタム・ハウス、そして世界を視野においた研究」、デーヴィッド・ロング、ピーター・ウィルソン編著『危機の20年と思想家たち——戦間期理想主義の再評価』宮本盛太郎、関静雄監訳（ミネルヴァ書房、2002年）]。

53) Hall, Ian, "Challenge and Response: The Lasting Enlargement of Arnold J. Toynbee and Martin Wight," *International Relations*, Vol. 17, No. 3 (2003), pp. 389-404.

し、多くの生徒たちに奨学金を取らせてオクスフォード大学やケンブリッジ大学に送り出したと言われている。おそらく彼は、教師として教壇に立ちつつ、大学での職を目指そうとしていたと思われる。しかし、時代はそれを許さなかった。1939年9月にヨーロッパで大戦が勃発し、やがて彼にも召集令状が送られたからである。ワイトは絶対平和主義者としての信条から、良心的兵役拒否者として登録する道を選択した。最終的に彼は軍務を免除されたが、その見返り条件として、もはや教壇に立つことはできなくなった。1941年のことである。

今や無職無給となったワイトは、オクスフォードに戻り、アフリカ研究者マージェリー・パーハムの下で進められていた研究プロジェクトに参加することとなった。パーハムは、1939年にオクスフォードのナフィールド・コレッジのフェローになっていたが、これは女性として最初の同コレッジのフェロー就任であった。また、植民地行政学の準教授にも任命されていた。彼女のプロジェクトは、イギリス領アフリカ植民地立法評議会の発展を調査するものであり、1946年までの5年間、ワイトはここに身を置いた。その成果は3冊の研究書となって表れた⁵⁴⁾が、この思いかけぬ結果として彼は、現実の国際政治についての研究に進むこととなったのである。と同時に、ギリシア語やラテン語の素養によって古典古代以降のヨーロッパとキリスト教世界に留まっていた彼の視野を、アフリカの植民地問題にまで拡大させる契機ともなったであろう。ワイトは寡作家だという一般的通念は根強いが、これらアフリカ植民地法制についての単著3部作は、もっと積極的に再評価されるべきではないかと筆者は考える。

例えば3部作最後の『イギリス植民地体制、1947年』は、計570頁にも及ぶ大作である。冒頭では、植民地の各立法評議会を、その統治形態によって9つに分類して分析を加えている。同書の大部分を占めるのは、植民地法制に関する具体的資料の編纂であるが、パレスチナ、アデン、ナイジェリアとカメルーン、ケニア、トリニダード・トバゴ、マルタ、バルバドス、ジャマイカ、セイロンの各イギリス領植民地について、委任統治 (mandate)、命令 (order)、国王通達

54) Wight, Martin, *The Development of the Legislative Council, 1606-1945* (London: Faber & Faber, 1946); *The Gold Coast Legislative Council* (London: Faber & Faber, 1947); *British Colonial Constitutions, 1947* (London: Oxford University Press, 1952).

(royal instruction)、法令 (act)、開封勅許状 (letters patent) などが収録されている⁵⁵⁾。これらの掲載と分類についてはワイトらしい緻密さが窺われ、現在でも資料集として価値あるものと認められる。

1946年に彼は再びオクスフォードからロンドンに、チャタムハウスに復帰した。そして記念すべき作品『権力政治』を刊行する⁵⁶⁾。同書は書物というよりはわずか66頁の小冊子であるが、内外で評判を呼び、国際政治学者としてのワイトの名を広めることとなった⁵⁷⁾。ホールによれば、この小冊子の評判がイギリスの有力紙『オブザーバー (The Observer)』の編集者の目にとまり、特派員としてアメリカに派遣されることとなった。1946年冬のことである。派遣目的は、ニューヨークで開催される国際連合の第一会期を取材するためであった。ワイトは現地からかなり多くの記事を書き送っており、『オブザーバー』紙のみならず『スコツマン (The Scotsman)』紙にも署名入り記事が頻繁に掲載された⁵⁸⁾。国際連合で国際政治の現場を体験したこと、またジャーナリストとしての活動も、後のワイトの思想形成に少なからぬ影響を与えたと考えられる。例えば、『国際理論』の中にある、国連総会での外交官たちの生々しいやり取りや駆け引きの描写には、明らかにこの時の体験が反映されている。

1947年初めにニューヨークからチャタムハウスに戻ったワイトは、再びトインビーの下で研究活動を続けた。この時期のワイトにとって大きな業績は、『1939年3月の世界』であった⁵⁹⁾。これは、トインビーにより刊行されてきた、初期チャタムハウスの最も重要な出版物、『国際問題概観 (Survey of International Affairs)』の一環として、第二次世界大戦勃発直前の国際関係分析に焦点をあてたものである。ワイト自身は同書の中で、第1部政治部門の「スペインとポルトガル」、「スイス、低地諸国、スカンディナヴィア諸国」、「東欧諸国」、「ド

55) *Ibid.*

56) Wight, Martin, *Power Politics* (London: RIIA, 1946).

57) 反響の大きさを物語ることとして、刊行から2年後にはドイツ語訳版が出されている。Wight, Martin, *Machtspolitik* (Nürnberg: Nest-Verlag, 1948).

58) *Wight Papers*, WIGHT/203, File, Top Shelf A 2.

59) Toynbee, Arnold and Frank T. Ashton-Gwatkin, eds., *Survey of International Affairs, 1939-1945: The World in March, 1939* (London: Oxford University Press, 1952).

イツ」の項目を執筆担当している。加えて第3部で、ワイト単独の論考「勢力均衡」が掲載されている。本書の表紙にこそワイトの名前はないものの、もっとも重要な箇所の執筆を任されていること、その担当頁数は他の執筆分担者と比べて圧倒的に多いことを考えると、トインビーの彼に対する信頼の高さが窺えよう(ワイト一人だけで、大部の書の約4割を担当している)。ワイト自身、本書に深い愛着を抱いていたようであり、同書に関する書評の新聞記事切り抜きを多数大切に保存していた(実際に同書の評価は高く、多くの書評で好意的に取り上げられていた)⁶⁰。

またこの時期のワイトの特徴として、精力的な執筆活動が挙げられる。冒頭で述べたように、一般にワイトは、完全主義者の寡作家として有名である。しかし、『オブザーバー』紙の特派員に抜擢されたことの縁から、同紙を始めとする新聞の掲載記事、また『インターナショナル・アフェアーズ』誌における書評に関しては、かなりの数が認められる。ワイトの、ジャーナリスト的側面が垣間みられる時期である。

ところで、大戦が終結したとき、彼は歴史家のバターフィールド、高名な神学者ラインホルト・ニーバーらと共に、キリスト教主義歴史家(Christian historian)と見なされるようになっていた。もちろん、ワイトが絶対平和主義の宗教信条によって兵役拒否を貫いたことも理由の一つだが、1940年代後半に彼が世界教会運動(the ecumenical movement)にのめり込んで行ったことが大きいとされている。例えば1949年夏には、学生たちを集めたキリスト教勉強会で歴史学について講義をしたり、キリスト教会統一運動の世界学生連盟の合宿に参加するなどしている⁶¹。しかし、ワイトがキリスト教に最も傾倒したのはこの時期で、以後の彼は少しずつ宗教に距離を置くようになる。ワイトの人生にとって、決定的な転機が目前に迫っていた。

60) 『1939年3月の世界』の第一草稿が、LSE図書館の公文書室に残されている。Wight Papers, WIGHT/221, File, No title, World in March 1939, first types.

61) Wight Papers, WIGHT/13, File, The Theory of History.

2. 壮年期～LSEでの「国際理論」

第二次大戦終結からの5年間、1940年代後半のワイトは、チャタムハウスでは研究活動に力を注ぎ、新聞紙上でも積極的な執筆を続け、同時にキリスト教会統一運動にも従事するといった、多面的な性質が垣間みられる時期だといえるだろう。しかし、やはり彼自身は、母校に戻って大学教員としての人生を歩みたいとの思いをずっと持ち続けていたようである。特に、40年代末、ワイトのチャタムハウスにおける契約更新と、更新後の彼の身分をどうするかをめぐって結論が長引き、再びワイトは大学への転職を模索するようになる。彼がオクスフォードのウースター・コレッジ、ナフィールド・コレッジなどへ教員公募に応募し、関係者に斡旋や照会を求めている資料が残されている⁶²⁾。

だが、教員採用の話は、思わぬ所から持ち込まれた。LSEで国際関係論を担当していたマニングの推薦により、ワイトは1949年秋から、同大学で準教授として着任したのである。ホールによれば、マニングと共にバターフィールドが、この新設された職位に就くよう、ワイトを説得したという。折しもLSEの国際関係学部は、同年のカリキュラム改革によって規模を拡大し、履修学生の増加に対処する必要があった。彼と一緒にF・S・ノースエッジも、同学部に採用されている⁶³⁾。しかし重要なことは、当時のイギリスで国際関係論の第一人者であったマニングの同僚となり、教壇に立ったことで、ワイトの名は広く知れわたることとなった。

ワイトは、国際連盟やイギリス外務省での勤務経験はなく、本来は歴史学で教育訓練を受けたことは、ここまで述べて来た通りである。その意味で、国際関係論の専門家だったとは言えない。しかし、LSEで講義を担当するにあたり、短期間に多くの書物を読み込み、ワイト独自の国際関係理論を構築していったようである。その証拠に、LSE図書館に所蔵されているワイト文書には、彼の几帳面で真面目な性格を窺わせる、講義ノートに美しい文字でぎっしりと書き込まれた数多くの文献からの引用や註が、多数残されている。

62) *Wight Papers*, WIGHT/203, File, Top Shelf A 2.

63) Bauer, Harry and Elisabetta Brighi, eds., *International Relations at LSE: A History of 75 Years* (London: Millennium Publishing Group, 2003), p. 19.

国際関係学部においてワイトは、マニングから引き継いだ「国際制度論 (International Institutions)」を担当することになり、これは国際連合の役割を強調する講義だったようである。そしてもう1つが、ワイト自ら命名した「国際理論 (International Theory)」で、学生の間で人気となり、後に伝説となった講義だった。ワイトの同僚であったノースエッジ自身の言葉を借りれば、この国際理論講義は、「トゥキユディデスからレーニンやヒトラーに至るまで、重要な思想家たちの国際システムに関する著作を概観したもの」だったという⁶⁴⁾。

さて、1956年から57年にかけて、ワイトはアメリカのシカゴ大学で研究休暇を過ごした。シカゴでワイトは、不在であったハンス・モーゲンソーの代わりに教壇に立つことになり、LSEでの経験をもとにして講義ノートを作り上げたが、これこそが「3つのR」講義であった。すでに本論でも多少は触れてきたが、これは古代ギリシア以来の人間の思想を、現実主義、革命主義、合理主義に分類して探究したものである。戦間期、とくに1930年代以降、国際関係においては理想主義と現実主義の2つの潮流がせめぎあっている、との理解が広まっており、特にカーが1939年に第1版を著した『危機の20年』において、この二分法が定着したかに見える。ワイトのシカゴ大学における講義は、カーの定説に対する問題提起という側面を持っていたといえよう。

この時期、1950年代のワイトは、既述したナフィールド時代の植民地法制史研究成果の刊行を除いては、単著としての出版はない。共著では、3人のアフリカ研究専門家と共に執筆した『アフリカに対する態度』があるが、これはペンギン・ブックスの双書として刊行された、一般人向けの啓発書である⁶⁵⁾。従って、戦後から50年代初頭にかけて本格的なアフリカ研究で単著3冊を出しながら、大きな研究は世に出なかったのが、実情である。彼が、LSEでの講義と学生への教育に並ならぬ力を入れたことは事実としても、ワイトの「完璧主義者」としての性質がそうさせたのだと、ホールも、ブルも、また他の研究者も言う。しかし筆者は、別の見方を抱いている。

64) *Ibid.*, p. 21.

65) Lewis, W. Arthur, Michael Scott, Martin Wight, and Colin Legum, *Attitude to Africa* (London: Penguin Books, 1951).

最近のホールの研究によって、実はワイトはLSEに就職して5年目頃から、すなわち比較的早い時期から転職を真剣に考えていたことが判明している。1955年には、ロンドン大学でトインビーが担当していた、スティーヴンソン講座国際関係史教授の後任に不採用となり、1956年にはオーストラリア国立大学(ANU)の太平洋研究所(the Research School of Pacific Studies)の長をめぐる長期間の交渉がうまく行かず、さらに翌1957年には、研究休暇先のシカゴ大学から教授職を打診されながら、最終的にはこちらも不首尾に終わったという。

LSEでのワイトの講義は学生の間にも人気を博していたし、招聘してくれたマニングとの間で特に衝突があったという話も見出せない。こうした事実から筆者が推論するに、またこれまでの彼の人生の歩みからして、ワイトは歴史学を大学で教えることに、強いこだわりを持っていたのではないだろうか。戦前と戦後のチャタムハウスでの国際関係の現状分析、戦中のナフィールドにおける植民地法制史研究、そしてLSEでの国際関係論の講義、それぞれを見事にこなして評価を受けつつも、ワイトの本心は歴史研究に専念したいということだったのではないか。そして、シカゴへの研究休暇の1年間も含め、こうした将来への見通しの不安定さが、ワイトの業績の数に影響を及ぼした可能性は少なくないと、筆者は推測している⁶⁶⁾。

ところで、英国学派の文脈でワイトを語る上で欠かせないのが、英国委員会である。正式名称「国際政治理論に関する英国委員会(British Committee on the Theory of International Politics)」は、アメリカのロックフェラー財団の援助によって1958年に設立され、本論でも何度か名前が出てきたケンブリッジ大学歴史学教授バターフィールド⁶⁷⁾が中心となって翌年から活動を開始した。既にア

66) しかしLSE時代(1950年代)においても、ワイトは積極的に『オブザーバー』紙ならびに『インターナショナル・アフェアーズ』誌に多数の書評を執筆していたことは、明記しなければならない。

67) バターフィールドは数多くの著作を残したが、日本語訳も出されている次の2つの研究は、その最も代表的なものである。Butterfield, Herbert, *The Whig Interpretation of History* (London: G. Bell and Sons, 1931) [ハーバート・バターフィールド『ウィッグ史観批判——現代歴史学の反省』越智武臣ほか訳(未來社、1967年)]; *The Origins of Modern Science, 1300-1800*, new ed. (London: G. Bell and Sons, 1957) [H・バターフィールド『近代科学の誕生』上・下巻、渡辺正雄訳(講談社、1978年)]。

メロカでは、同財団の支援によって1954年に国際政治理論を研究する委員会が活動を始めており、大西洋を挟んだイギリスでも同様の委員会を設立してはどうか、という提案によって誕生したという経緯がある。バターフィールドは、カーでも、トインビーでも、マニングでもなく、ワイトに英国委員会の一員として参加するよう要請した。以後、バターフィールドとワイトの2人は、中心的存在となって同委員会の運営に当たることとなり、ここから優れた研究業績を世に出すこととなる⁶⁸⁾。

3. 中年期～サセックス大学での教育と研究

ワイトがLSEを去ったのは、1961年のことだった。その理由についてスガナミは、伝聞を紹介する形で、「ロンドン大学の国際関係論の教授としてマニングの地位を継承する程その学科としての成立に自信をもてないと考え」たからだとして記している⁶⁹⁾。一方でホールは、ワイトの個人的な覚え書きの中に、マニングの後継者争いに巻き込まれなくなかったからだ、という記述を見つけて説明している。さらにワイト自身は後年、理由の一つとして、古代ギリシアの歴史を再び教えたいと思ったからだとして手紙に書いている⁷⁰⁾。筆者には、そのどれもが理由であったように考えられるが、彼の転職先が、それを裏付けているように思われる。

LSEを去るにあたって、ワイトがマニングに書いた手紙が今に残されている。そこには、サセックス大学で新学部の開設にあたって自分に声をかけてくれたことと、LSEに残ることとを悩んだ末に、最終的にサセックスの申し出を受け入れる決断を下したこと、チャールズ（・マニング）にはとても感謝していること、などが率直に綴られている⁷¹⁾。手紙の宛名がマニングのファーストネームで書

68) 英国委員会研究については、イタリアのミラノ大学歴史学教授ヴィジェッツィによる次の書物が最高峰であり、おそらくこれを超える研究は今後も出ないのではないかと筆者は考えている。Vigazzi, Brunello, *The British Committee on the Theory of International Politics, 1954-1985: The Rediscovery of History* (Milano: Edizioni Unicopli, 2005).

69) 菅波、前掲論文、50頁。

70) Vigazzi, *op. cit.*, p. 414. ワイトが英国委員会の一員であるキーンズ＝ソーパーに宛てて1970年10月に認めた手紙の中の一節である。

かれていることや、文面からも、LSE時代の最後まで、2人の関係は良好だったことが窺える。

彼は、新設されたサセックス大学に歴史学教授として招かれ、またヨーロッパ研究学部の長として、学部の立ち上げとカリキュラム作成に携わった。ワイトは学際的なコースを設計し、そこには歴史学、哲学、経済学、政治学、社会学、地理学、国際関係論、各国語が組み合わされていたという。困みに、イギリスにおけるヨーロッパ研究学部の、ワイトによるこれが初めての試みであった。

もともとワイトは、高校で歴史学教師をしていた頃から、教育者としての才能と資質に恵まれていたことが知られていた。LSEを去った真の理由が何であれ、彼はそれまでの様々な経験を活かして、彼の信じる理想的なヨーロッパ研究の在り方を新天地サセックスで追求したようである。47歳になるワイトの、新たな出発であった。1960年代の中年期のワイトは、サセックスで教育や大学の管理運営に集中し、他方で英国委員会の場で本来の研究活動を追求していた、と見ることができよう。

英国委員会は、代表者であるバターフィールドが学寮長を務めるケンブリッジ大学ピーターハウス・コレッジ⁷²⁾で、1959年から年3回週末開催の日程で進められた。バターフィールドは当時既に、イギリスを代表する高名な歴史家として広く知られていたが、彼は国際政治理論の研究者だったわけではない。その彼が、自分の協力者としてワイトを特に選んだのは、一つには以前から信仰を通じて知己であったことと、もう一つは歴史学を基礎とした国際政治の理論研究を行いたいとの思いがあったためと考えられる。2人以外にはデズモンド・ウィリアムズ、ケネス・トンプソン、ドナルド・マッキノン、マイケル・ハワードが初期の委員として参加した。会の進め方は、年3回の研究会に合わせて2から4名の研究者が論文 (paper) を提出し、それについて議論するというものだった。議長には、

71) Wight to Manning, 27th February 1961, *Wight Papers*, WIGHT/233/31, File 1950-1972, Correspondence.

72) 1284年に創立された、ケンブリッジ大学最古の歴史を誇るコレッジである。Peterhouse College, Cambridge, (<http://www.pet.cam.ac.uk/>), accessed 7th July 2012. バターフィールドは、1955年から68年までピーターハウスの学寮長を務め、引退した68年には勲騎士に叙され Sir の称号を与えられた。

バターフィールドが就任した。

1959年1月、英国委員会の最初の会合が開催された。ワイト、バターフィールド、マッキノンの3名が研究論文を提出したが、この時にワイトが出したのが、彼の名声を確認することとなる「国際理論はなぜ存在しないのか？」であった⁷³⁾。後にこの論文は、既述した『外交の研究』が刊行されるとその第1章に掲載され、多くの国際関係論／国際政治学の研究者が注目するところとなった。

ワイトは、英国委員会を自らの活躍の場として、以後精力的な研究を続ける。翌1960年1月の会合では、「科学の進歩は国際政治の特質を、程度においてではなく本質において変えてきたか？」と題する論文⁷⁴⁾を提出、1961年4月の会合では「勢力均衡」論⁷⁵⁾を提出、続けて同年10月の会合時提出論文は「西洋的価値」⁷⁶⁾と、極めて活発である。しかも、ごく限られた人数が出席する内輪の委員会に出されたものとはいえ、ワイトの各論文は長文かつ水準の高いものであった。

ロックフェラー財団からの資金援助の更新を続けながら7年間、英国委員会の活動は展開され、その成果として1966年に刊行されたのが、バターフィールドとワイト2人の共編著『外交の研究 (*Diplomatic Investigations*)』(邦訳名は『国際関係理論の探究])であった。6人の執筆者により全12章からなるこの書物では、ワイトは「国際理論はなぜ存在しないのか」「国際関係における西洋的価値」「勢力均衡」の3章を担当している。共編者であるバターフィールドでさえ、2章しか担当しておらず、1人で3章も執筆していることから、委員会内におけるワイトの存在の大きさが窺える。

同書の特徴は、そのまえがきにいみじくも書かれているように、アメリカ委員

73) Wight, "Why is There no International Theory?"の最初の草稿と構想メモ(ただし日付不明)は、LSE図書館公文書室に収められている。Wight Papers, WIGHT/100, File OO-'International Theory'. 幸い、ヴィジェッツィの研究書には、1959年1月の英国委員会最初の会合に提出されたワイトの同論文が再録されている。Viguzzi, *op. cit.*, pp. 357-368.

74) Wight, "Has Scientific Advance Changed the Nature of International Politics in Kind, not Merely in Degree?," *BCTIP Papers*, Box 4, Martin Wight File.

75) 「勢力均衡」論文をめぐる議論の記録が、チャタムハウスの公文書に残されている。"Discussion of Martin Wight's paper on *The Balance of Power*," *BCTIP Papers*, Box 1, Miscellaneous papers.

76) Wight, "Western Values," *BCTIP Papers*, Box 5.

会の議論とはかなり異なるものであった。第一に、「国際理論の限界や使用法ではなく、対外政策の形成でもなく、外交共同体それ自身・国際社会・国家システムに、座標軸が置かれる」こと、第二に「委員会の関心は、国際政治についてのすべてを包摂する理論枠組み、一般理論にはなかった」のであって、「その視点は総じて歴史的」であったこと、最後に「道徳の問題にたいして広く関心を有している」こと、以上は英国委員会の参加者の共通認識であった⁷⁷⁾。やがて本書は、英国学派の古典と見なされるようになる。

興味深いことに、ワイトもバターフィールドも、『外交の研究』がここまで売れるとは思っても見なかったようである。そのため、予想外に多くの印税が入金されたため慌てて執筆者6人で担当頁の量に応じて分割することに決定したが、そのやり取りを示す多くの手紙や資料が残されている⁷⁸⁾。そして、この成功に勇気づけられて、ワイトは英国委員会として第二弾の著作の企画に乗り出した。彼が思い描いていたのは、「国家システム (States-Systems)」に関する研究書であった。すでに1964年10月の委員会会合で、ワイトは「古代ギリシアの国家システム」と題する論文を提出し、1965年7月会合ではその続編ともいべき「古代ギリシアとペルシア」論文⁷⁹⁾を、1967年4月会合でも「国家システム (*De Systematibus Civitatum*)」論文⁸⁰⁾を、次々と提出していった。

ところがこの頃から、英国委員会の運営や方向性をめぐって、バターフィールドとワイトの間には大きな溝が広がってゆく。バターフィールドが1968年4月にワイトに宛てた手紙の中には、英国委員会が国際関係の「社会学者」たちによって優位を占められることに対する強い拒否感が書かれてあり、委員会は「英国的」もしくは「古典的」方法論を取るべきだと主張している。さらに、ワイトが第二弾として進めていた共同執筆による出版計画にも真っ向から反対を唱えており、各人がそれぞれ個別に、委員会での議論をもとにして本を出版すればいい

77) Butterfield and Wight, *Diplomatic Investigations*, pp. 12-13 [邦訳前掲書、iv-v].

78) *Wight Papers*, WIGHT/233/43, File 1961-1972, Correspondence.

79) 以上2つの論文は、それぞれ「ギリシアとローマの国家システム」と題する論文構想の前半部分として構想されたようである。Wight, "The State-System of Greece and Rome," *BCTIP Papers*, Box 4.

80) Wight, "De Systematibus Civitatum," *BCTIP Papers*, Box 4.

ではないか、と述べている⁸¹⁾。結局、バターフィールドは委員会の代表を降りてしまい、代わってワイトが中心となって以後の活動を取り仕切ることとなる。

サセックス大学のヨーロッパ研究学部長の職務から、ワイトは1969年に解放された。おそらく、英国委員会を足場に、彼はさらなる研究の進展を目指したことは容易に想像できる。1970年に同委員会は再編され、ワイトは以前にも増して積極的に会合での論文提出を進めた。同年9月、ほぼ3年ぶりに開かれた研究発表のための会合で、ワイトは「諸国家の利益」論文⁸²⁾を、翌71年1月会合では「三大国と二大国」論文⁸³⁾を、同年4月には「国際的正統性」論文⁸⁴⁾を、同じく7月には「我々の国家システムの起源、地理学的境界」論文、さらに9月には「我々の国家システムの起源、年代学的境界」論文⁸⁵⁾を提出、という驚異的速度で研究を著しつつあった。しかしながら、ワイトの精力的な働きかけにも拘わらず、英国委員会として「国家システム」を刊行する計画は挫折に終わる。最後まで全体として整合性や統一性が取れなかったことが、原因であった。1971年5月にワイトが認めた、出版断念を確認した手紙には、失望感が滲み出ているように思われる⁸⁶⁾。

「国家システム」刊行計画は失敗したものの、ホールが指摘するように1960年代末からのワイトは、再び国際関係論に対する研究に力を入れ始めたように見える。70年から71年にかけてのわずか1年あまりに、英国委員会に5本もの研究論文を提出したことは驚嘆すべきことであり、また彼は、英国委員会とは別に、「勢力均衡と国際秩序」と題する論文を書き上げ、これはマニングの退職記念論文集として73年に出版された⁸⁷⁾。もし彼があと10年、あるいは5年生きて知

81) Vigezzi, *op. cit.*, pp. 411-412. 1968年4月7日付けで、バターフィールドからワイトに宛てた手紙である。

82) Wight, "Interests of States," *BCTIP Papers*, Box 4.

83) Wight, "Triangles and Duels," *BCTIP Papers*, Box 4.

84) Wight, "International Legitimacy," *BCTIP Papers*, Box 4.

85) Wight, "The Origins of Our States-Systems," *BCTIP Papers*, Box 4.

86) *BCTIP Papers*, Box 5. 1971年5月13日付け、「国際政治理論に関する英国委員会」と題する、サセックス大学の公式レターヘッド用紙に印字された文章である。

87) Wight, Martin, "The Balance of Power and International Order," in Alan James, ed., *The Bases of International Order: Essays in Honour of C. A. W. Manning* (London: Oxford University Press, 1973), pp. 85-115.

的活動を続けたなら、国際関係論についてさらに大きな業績を残したかもしれない。しかし、終わりは突然にやってきた。

1972年7月15日、ケント州の自宅にいたワイトは、若い頃からの慢性的喘息の発作を起こして心不全となり、突然死した。まだ59歳の若さであった。LSE図書館のワイト文書には、死の直前まで、原稿に手を入れたり、友人や知人たちといつも通りに手紙のやり取りをしていたことが窺える資料が残されており、全く予期せぬ死であったと思われる。本人にとっても、さぞかし無念だったに違いない。

IV ワイトにみられる国際法史の思想

ここまでワイトに関する先行研究、ならびにその生涯と業績を再構築してきた。ワイトが英国学派を確立したとする評価については、確認できたように思う。では、筆者がこれまで探究してきた、英国学派における国際法の伝統ないし要素は、ワイトにおいて具体的にどう理解されたらよいであろうか。本章では、その手掛かりとして、彼の代表作『国際理論』に焦点をあてて考えてみたい。

『国際理論』の特徴は、古代ギリシア以来の国際関係思想の流れを、合理主義、現実主義、革命主義の3つのパラダイムに分類し、それぞれの頭文字を取って「3つのR」として知られていることは、既に述べた通りである。彼はこの3つに各々人名をつけて、グロティウス主義（合理主義）、マキアヴェッリ主義（現実主義）、カント主義（革命主義）とも呼んでいる。ワイト自身はこの潮流の中で、グロティウス主義に最も親近感を抱いていたことは、指摘されるところである⁸⁸⁾。

彼は、思想的に影響を受け、かつLSEの先輩でもあったマンニングのように法学を修めたわけでも、弁護士資格を持っていたわけでもなかった。しかし、最初の公刊論文でビトリアやスアレスに言及しているように、若い頃から国際法の思想家たちに深い関心と興味を抱いていたことは間違いない。歴史学の素養によっ

88) ブルによる指摘。Wight, *International Theory*, xiv [邦訳前掲書、401頁]。

て国際関係を理解かつ説明しようとしたワイトにとって、西洋近代の国際法学者の著作を原典からあたることは、特に不自然なことではなかったのかもしれない。

では、『国際理論』第3章「国際社会の理論」を検討してみよう。この章では、国際社会とはいかなるものであるか、とりわけ近代以降どのような議論がなされてきたのかが、論じられている。ワイトによれば、現実主義を代表する国際法学者はヴァッテル⁸⁹⁾である。その理由として、ヴァッテルによる「諸国民の法は(道徳的人格としての)諸国家に適用される自然法である」という定義が、ホブズの『市民論』および『リヴァイアサン』からの援用によっていることを挙げている⁹⁰⁾。ただ、あくまでワイトの議論はホブズに集中しており、ヴァッテルはあくまで傍証でしかない。ワイトの理解では、ホブズが「国際関係あるいは国際社会は自然状態に等しいという方程式を最初に定式化した」のである⁹¹⁾。国際社会とは何かに対する現実主義者の答えは、ホブズによる「万人の万人に対する戦争 (*bellum omnium contra omnes*)」だという⁹²⁾。

次に、合理主義的な見解を最初に厳密に定式化したのは、スアレス⁹³⁾である、とワイトはいう。スアレスによれば、国際社会とは、「擬似政治的・道徳的社会 (*societas quasi politica et moralis*)」として描かれる。スアレスの考えでは、「すべての国は1個の完全な共同体ではあるが、にもかかわらず、世界主体 (*universal body*) または世界全体の一員」でもあって、「この一員であるということが国際法の基礎をなす」とされる⁹⁴⁾。また、ホブズに対応する形で、合理主義の範疇に入る者としてロックを挙げ、さらにグロティウスとトクヴィルも同じよ

89) ヴァッテルを国際法史の中に位置づけた優れた論考としては、以下を参照。Hurrell, Andrew, "Vattel: Pluralism and its Limits," in Ian Vlack and Iver B. Neumann, eds., *Classical Theories of International Relations* (London: Macmillan, 1996) [アンドルー・ハレル、押村高訳「ヴァッテル、多元主義とその限界」イアン・クラーク、アイヴァー・B・ノイマン編『国際関係思想史——論争の座標軸』押村高、飯島昇蔵ほか訳(新評論、2003年)].

90) Wight, *International Theory*, pp. 30-31 [邦訳前掲書、40頁].

91) *Ibid.* [同上書].

92) *Ibid.*, p. 48 [同上書、61頁].

93) スアレスについては、日本人碩学による次の古典的著作を参照。伊藤不二男『スアレスの国際法理論』(有斐閣、1957年)。

94) Wight, *International Theory*, p. 39 [邦訳前掲書、50頁].

うな国際社会観を持っていたと、ワイトは分析する。

最後にワイトは、国際社会に対する革命主義の見方は「単一の人類共和国」という立場だという。そしてこの立場を主張した代表的国際法学者として、クリスティアン・ヴォルフ⁹⁵⁾を挙げる。ワイトの理解では、ヴォルフの考える国際社会とは、「個別国家を市民とし、これらの国家に対して権限を行使することができる世界国家 (*civitas maxima*)、すなわち大規模な社会 (*great society*) または超国家 (*super-state*)」である⁹⁶⁾。もっとも、世界国家の考えはヴォルフが発明したのではなく、すでに彼以前にビトリアやジェンティーリが概念を発展させていたとワイトは述べている。さらに、この思想の流れはカルヴァンにまで遡るといふ。

『国際理論』の第3章では、国際社会の理論についてさらに複雑で詳細な分析がなされているが、単純化してヴァッテル=現実主義、スアレス=合理主義、ヴォルフ=革命主義という大胆な分類だけを見ても、ワイトの独創性が十分に窺える。なぜなら、一般的な国際法史の理解の中では、ここに挙げた3名は、学説史発展の中に位置づけて言及されることが多いからである。すなわち、スアレス(1548-1617)、ヴォルフ(1679-1754)、ヴァッテル(1714-1767)として、偉大なる「国際法の父」グロティウス(1583-1645)を挟んで、国際法学の確立に対する貢献と限界という視点からの分析が、典型例である⁹⁷⁾。

それに対してワイトの分析は、人物と著作に焦点をあて、それぞれどのような思想的傾向を持っていたかを起点に分類されている点に特徴がある。続けてもう一箇所、『国際理論』の第11章「国際法・義務・倫理の理論」を見てみよう。こ

95) ヴォルフに関しては、以下を参照。柳原正治「クリスティアン・ヴォルフ」勝田有恒、山内進編『近世・近代ヨーロッパの法学者たち——グラーツィアヌスからカール・シュミットまで』(ミネルヴァ書房、2008年)所収。

96) Wight, *International Theory*, p. 41 [邦訳前掲書、51頁]。

97) Nussbaum, Arthur, *A Concise History of the Law of Nations*, rev. ed. (New York: Macmillan, 1954) [A・ニュースボーム『国際法の歴史』広井大三訳(こぶし社、1997年)]。アルトゥール・ヌスバウムによる本書は、すでに原書の刊行から半世紀以上が経っているにも拘わらず、国際法史を正面から扱った類書がほとんどない中でいまだに貴重な研究である。法学者ヌスバウムその人に関する邦語による研究としては、屋敷二郎「アルトゥール・ヌスバウムの法事実研究——講壇と法実務の間」鈴木秀光、高谷千佳、林真貴子、屋敷二郎編『法の流通』(慈学社、2009年)所収、を参照。

の章では冒頭で、国際法のいくつかの学派が「3つのR」にどう関連するかについて、短く書かれている。ワイトによれば、国際法にはグロティウス学派、自然法学派、実定法学派の3つの伝統ないし学派が存在するという。彼にとっての自然法学派とは、「自然法以外には国際法など存在しないと断言し、国際関係における実定法の存在を否定した」ものである。対して実定法学派は、「慣習や条約といった共通の同意に基づくもの以外には交際法は存在しないと断言した」ものとされた。そして、「他の2つの学派の中間に位置する人々」がグロティウス学派だという⁹⁸⁾。

これら3つの学派は、「3つのR」に「完全には対応していない」と認めつつも、ワイトは国際法理論を自らの3つの伝統に引きつけて論述する。まず、合理主義に相当するのはグロティウス学派である。なぜなら彼らは、自然法と、国家間に存在する慣行や合意の双方から、等しく国際法を導き出すからだという。と同時に合理主義は、ワイトの言葉を借りれば、「ホッブズ以前の自然法の伝統的教義を支持している」のである。その自然法主義の伝統は2つの根本的教義を持っており、その1つは、「国際共同体において諸国家の主権が存在するのにだれも認める上位者がいないからといって、それが純粹なるアナキーを意味するものではない」ということであり、もう1つは、法とは何かを示す証拠を、全ての民族が持つ既存の慣行に求めることである、とする⁹⁹⁾。ここでワイトが述べている、国際社会には国家の上位者がいないがアナキーではない、という説明は、まさに英国学派の最も核心的な理論であることは注意すべきである。グロティウスは、この2つの自然法の教義を一緒にして近代国際法の基礎としたのだ、とワイトはいう。

現実主義と革命主義における国際法の理論は、どちらも実定法主義の傾向が強いとされる。現実主義では、国際法学者ブライアリーの著作を引用する形で「同意理論」を用いて短く説明がなされている¹⁰⁰⁾。また革命主義では、ソ連邦の国

98) Wight, *International Theory*, p. 233 [邦訳前掲書、318頁].

99) *Ibid.*, p. 234 [同上書、319頁].

100) ワイトが文中で引用しているブライアリーの著作は、以下である。Brierly, J.L., *The Law of Nations* (London: Oxford University Press, 1938) [ブライアリー『国際法——平時国際法入門』一又正雄訳(有斐閣、1955年)].

際法理論を紹介する中で解説されており、ワイトによれば、ソヴィエト国際法の定義は性質において実定法主義だという。しかし、ソ連邦にとっての国際法とは、極めて実用的な「政治の道具」でしかなく、「革命国家による聖戦遂行のためのイデオロギイ的武器」である¹⁰¹⁾。『国際理論』巻末のパラダイム表に従ってまとめると、現実主義=実定法主義、合理主義=自然法、革命主義=自然権、ということになる¹⁰²⁾。

ワイトはさらに議論を発展させ、ここまで述べてきた国際法概念を支えている国際的義務についての考察を加える。まず合理主義については、ダントレーヴの『自然法』を引用しつつ、ラテン語の格言「契約は遵守されるべきである (*pacta sunt servanda*)」を挙げる。つまり合理主義にとって、国際的義務は神聖なものであり、条約は拘束力を持つということが、最も重要な原理である¹⁰³⁾。

現実主義にとって、条約は一時的なものでしかなく、国益にどれだけ有用かという観点から判断される。従って、これに相当する格言は「状況が変わらない限り (*rebus sic stantibus*)」となる。また革命主義には、国際的義務に関する特定の理論を見出すことは難しいという。ここでもソ連邦の外交が例として挙げられているが、同国の目標は国際革命なのであって、その特徴は「柔軟性と日和見主義的な可能性」だとワイトは断じている。ラテン語格言は「異端者との約束は守らなくてもよい (*cum haereticis fides non servanda*)」とされる¹⁰⁴⁾。

本章で見たワイトの国際法史観は、限定的なものである。それでも、彼の壮大な国際理論の中において、国際法学者たちの占める位置が決して小さなものではないことは、言明できるであろう。もとより、法学者もしくは国際法専門家の目からすれば、ワイトの解釈や分類は、多少奇妙なものに映るかもしれない。しかし、それこそがワイトの独創性であると筆者は考えており、ワイトの国際関係理論への貢献が、現在に至るまで多くの問題提起を行っていることを考えると、彼と国際法史との関わりについての研究をさらに進める必要があるであろう。

101) Wight, *International Theory*, pp. 235-238 [邦訳前掲書、321-323頁].

102) *Ibid.*, p. 278 [同上書、393頁].

103) *Ibid.*, p. 238 [同上書、324頁].

104) *Ibid.*, pp. 238-241 [同上書、324-328頁].

V おわりに

ワイトの物語は、その突然の死によっては終わらず、その後に新たな発展を見せる。バターフィールドは、委員会の方向性をめぐってワイトと対立したが、マーティン・ワイト記念財団が設立されると、その第1回記念講演を引き受けたのは他ならぬバターフィールドであったし、彼が英国委員会の議事録、メモ、提出論文などの資料を大切に保管していたおかげで、それが最終的にチャタムハウスに寄贈され、貴重な研究資料として我々も読むことができるのである。また彼は、議長職を降りたあとも、ワイトの死後も、英国委員会の継続に力を尽くした。

もう一人、大きく貢献したのはブルである。ワイトによって、初期の段階から英国委員会の一員に招かれたブルは、ワイトとバターフィールドが対立していた時期も、ワイトを支え続けた。LSEと英国委員会において、先輩でもあり同僚でもあったワイトを、ブルは終生尊敬と畏敬の念をもって接していた。1977年にブルの尽力によって出版が叶った『国家システム』は、これまでの流れで想像できるように、本来はワイトが出版企画をたてていた書物を、英国委員会に提出したワイトの論文を集めて刊行したものである¹⁰⁵⁾。奇しくも同じ77年には、ブルの世界的名声を確立した名著『アナーキカル・ソサイエティ』が刊行されている。

加えて、同じくブルの努力で1978年に刊行された『権力政治』も、ワイトが1946年に出版した自著に、長年にわたり推敲と加筆修正を繰り返してきた遺稿を復元して出した、いわば第2版と呼べる内容のものであった¹⁰⁶⁾。もしブルの

105) 『国家システム (Systems of States)』に収められている7本の論文は、1. 「国家システム (*De systematibus civitatum*)」2. 「古代ギリシアの国家システム」3. 「古代ギリシアとペルシア」4. 「我々の国家システムの起源、地理学的境界」5. 「我々の国家システムの起源、年代学的境界」6. 「国際的正統性」7. 「三大国と二大国」であり、計7章から成っている。

106) 1946年の刊行時には、わずか68頁の小冊子であったが、その直後から拡大改訂版の出版をワイトは計画し、実際に出版社と約束していたようである。しかし、ついに生前には完成を見なかった。1978年版は、その意味では完全版とは言えないまでも、全24章から成り合計300頁を超える大部なものとなり、現在でも書店で購入可能なワイトの作品の一つである。

努力がなければ、ワイトの本格的学術書はアフリカ植民地研究の3冊と、『外交の研究』1冊だけで終わり、その業績は歴史の闇の中に埋もれてしまったかもしれない。長年ワイトの傍にいたブルだからこそ、これらの復元作業による単著2冊の刊行が可能となったことは、間違いない。それ故、ワイトに対する評価の高まりは、ブルの功績でもある。そのブルも、ワイトの後を追うように1985年、わずか52歳の若さで病により急逝した。

実はブルが亡くなる前、ワイト未亡人であるガブリエラ・ワイトとブルとの間で、残されたLSE時代の講義録メモをもとに伝説の「国際理論」講義を復元することが計画されていた。しかしブルの死去により、この地道で時間のかかる作業はガブリエラと、ブライアン・ポーターの手に委ねられた。そしてワイトが亡くなってから19年後の1991年、ついに伝説の講義は書物となって世に出された。それが『国際理論——3つの伝統』である。今や同書は、国際関係論を学ぶ者にとって、英国学派という枠を超えて、重要な古典に数えられている¹⁰⁷⁾。ガブリエラとポーターによる献身的な復元作業はさらに続けられ、いわば『国際理論』の補足版として、2005年に『国際理論における4人の重要な思想家——マキアヴェッリ、グロティウス、カント、マッツィーニ』が刊行されるに至った¹⁰⁸⁾。ワイトの再評価の高まりにあたって、ブルと並んで妻ガブリエラの果たした役割の大きさは、言を待たない。

本論文は、冒頭で述べたように筆者にとって、英国学派3部作の最後を飾るものである。前2作では、それぞれ鍵となる重要人物の人となりだけでなく、国際法史の視点から主要業績の分析も試みたが、残念ながら本論文では全面的な分析には至らず、部分的なものに留まっている。差し当たっては、マーティン・ワイトの生涯と業績を描き出したことと、『国際理論』において見られる国際法史の要素に若干の考察を加えたことで満足しなければならないであろう。ワイトの思

107) 例えば、英語圏の大学で国際関係論入門として広く読まれている次の書物では、ワイトの「3つのR」が重要な理論の1つとして解説されている。Jackson, Robert and Georg Sorensen, *Introduction to International Relations: Theories and Approaches*, 2nd ed. (Oxford: Oxford University Press, 2003), pp. 146-152.

108) Wight, Martin, *Four Seminal Thinkers in International Theory: Machiavelli, Grotius, Kant and Mazzini* (Oxford: Oxford University Press, 2005).

想、彼の言葉に従えば国際理論の中に、国際法史がどのように取り込まれ、また解釈されているのか。筆者にとっても、研究はまだ緒に就いたばかりである。

本研究は、科学研究費基盤研究（C）課題番号 22530204「共生と脱覇権の国際秩序像——英国学派国際関係論による包括的検討」平成 23 年度から 25 年度の助成を受けたものである。